

10. トライアングルストーン

各務原市立尾崎小学校

5年 沖野 碧唯 林 和歌奈

↓

敦賀市立東浦小学校

6年 大道 萌 上野 いつき 平田 彩笑

5年 吉峯 知歩 田保 明日香

アヤは、海冠小学校に通う五年生。今日はアヤのたん生日。いいことあるといいなあ。今日もアヤは元気に登校。……かと思いきや、元気すぎてこけた！

「いたたたた……あれっ」

ふと見るとかばんの中に、青い光が？

「なに、これ」

のぞいてみると、なんと、青い光につつまれて、キラキラと輝く玉があったのです。

「こんなの、家にいるときはなかったのに……っていうか、なんなの、これ」

のぞきこむように見ているアヤ。とそのとき、アヤは青い光につつまれて、玉の中にすいこまれてしまいました。

「キャアーー！」

アヤが目を開けると、そこはしーんと静まりかえった別世界でした。

「どこ、ここ。見たことない所だわ」

そう言ったしゅん間、けむりの中に黒いかげがうき出てきたので、アヤはびっくりしてにげ出しました。すると、今度は何か動物のような小さいかげも見えてきました。

「今度は何？ っていうか、私がなんでこんな目にあわなくちゃいけないの」

と思ったら、出てきたのは小さな犬でした。

「あなたはだれ？ どこからきたの？」

犬がしゃべったので、アヤは気を失いかけて、

「わ、私は、この世界にいつのまにか来てしまったアヤだけど……」

「あ、あなた、プロテニ玉をのぞきこまなかった！？」

「ええ。きれいな玉を見つけたから、のぞきこんで見たわ」

「やっぱり！ 私が探してた子だわ！ アヤ、あなたはこの世界で玉を三つ見つけなくては、自分の世界にもどれないの」

「なんで、その玉探しをするのが私なの？」

「あなたが、選ばれし者だからよ。私、あなたといっしょに旅をする、よう精犬のロン。よろしくね」

「う、うん。なんで私がその選ばれし者になったのか、よく分からないけれど、まあ、よろしく。いっしょに冒険するの？ だって私、学校に行かなくちゃならないから、そんな時間ないよ？ どうやって行くの？」

「まあ、見てればわかると思うけど、私は長い時間を一分に縮めることができるの」

「ってことは、例えば、夜に冒険に出かけて、長い旅をしてもどって来た時は、まだその日の夜……っていうことができるわけ？」

「そうそう。もう少しいろいろ魔法が使えるんだけど、とくいなのは、その『長短マーチ魔法』なの」

「へえー。で、いつ行くの？ その冒険。うちまでは一分しかかからないから、いつでもいいよ」

「うん。実は、もう、今から行かなくてはいけないの。こんな風にしゃべっているひまはないのよ。でも、家の人に一分だけ出かけるって言うっておかなくていい？」

「うん。お母さんもお父さんも仕事で、夜帰って来るから、今はだれもいないからいいのよ。で、どっちに進めばいいの？」

「大丈夫。この追跡ダイヤが、どっちに行けばいいか教えてくれるから。でも、とちゅうにはかいぶつや、おばけ、こわい動物などがたくさんひそんでいるの。そのことも教えてくれる、便利なダイヤよ」

「どうやって見るの？」

ロンは耳の中から赤いダイヤを取り出しました。

「このダイヤをのぞくと、きけんな場所や、この辺りの玉のありかがわかるの。それで玉を探し当てるのよ」

「ふーん。じゃあ、玉探しにレッツ・ゴー！」

「やる気だね、アヤ。その調子よ」

「うん！」

アヤとロンは、はりきって、追跡ダイヤをのぞいて、赤まるが点滅している所に向かって走り出しました。これからどんな冒険が始まるのでしょうか。

「あのへいをこえると、『大きすぎる毒ヘビ』がいるらしいわよ。気をつけないと、かまれて死んでしまうおそれがあるの。だから、これを使って」

とロンが、何かのスプレーを取り出しました。

「なあに、このスプレー」

「これ、目が見えなくなり、ひふが黒くなるスプレーよ。これを『大きすぎる毒ヘビ』にひとふきかければ、たちまちくるってたおれてしまうわ」

「ふーん。役に立つんだね、このスプレー」

「ええ。でも、小動物には効かないの。なぜかしらねえ」

ロンはふしぎそうに言いました。

「でも、このへんには小動物がいないから大丈夫」

「んー？ わからないわよ。もしかしたら、いるかも」

ロンの言葉は意外にも的中しました。へいの穴から、犬のような小動物が出てきたのです。アヤとロンがふせると、その小動物はすごいスピードでかけぬけていきました。

「びっくりした。あれは何？」

「『王様気取りのこわいが犬』っていう小動物よ。あのスプレーが効かないの」

アヤとロンは、へいをこえました。

「あっ、『大きすぎる毒ヘビ』が死んでる……と、その下に玉が！？」

「それ、一つ目の玉よ。三つの玉は、一つ目が赤、二つ目は青、三つ目は黄の色をして

るの」

こうして二人は一つ目の玉を手に入れました。★

「この赤い玉、とってもきれいなね」

アヤがのぞきこんだ瞬間、

「キャー。何か光ってる」

アヤが悲鳴を上げました。すると、ロンは冷静に答えました。

「これは、二つ目の追跡ダイヤよ。次の青い玉のありかを教えてくれているの」

「へええ、そうなんだ。じゃあ、次は、このちかちか点滅している青い光の所へ行けばいいのね」

「さすが、アヤ。のみこみが早いわね。その調子よ」

「うん」

二人は、また、張り切って走り出しました。しばらく行くと、池にたどり着きました。

「何だか気味が悪いよね。何か出てきそう」

アヤが不安そうにつぶやくと、

「その通り、このどろどろした汚い池には『不潔すぎるどろどじょう』がいるらしいわ」

「汚くて不潔なんて、最悪だわ」

「それだけじゃあないの。その不潔などろどじょうのつばをかけられた者は、たちまち体がとけて、どろどろになってしまうの。だから、これを使って」

と、ロンが氷を取り出しました。

「うわあ、冷たくて気持ちいい。……ていうか、何なの、これ」

「これはね、一瞬で凍らせてしまう氷よ。これを『不潔すぎるどろどじょう』に投げつけば、たちまち凍って死んでしまうわ」

「ふーん、ロンって、便利なものを色々持っているわね」

「まあね」

そんなことを言っていると、突然、池から『不潔すぎるどろどじょう』が飛び出してきました。

「キャアー」

二人はあまりにもびっくりして、手に持っていた氷を落としてしまいました。

その時です。

シュッ！

何か小動物らしき黒い影が目の前を通り、『不潔すぎるどろどじょう』を真っ二つに切り裂いたのです。

「もしかして、今のは『王様気取りのこわいが犬』じゃないの」

アヤがふるえながら聞くと、

「間違いないわ。私たちを助けてくれたのかしら。お礼を言わなきゃ」

二人は、慌てて辺りを見回しましたが、『王様気取りのこわいが犬』の姿はどこにも見えません。

「なんて、足が速いのかしら。……と、『不潔すぎるどろどじょう』の横にあるのは！」

「あっ青い玉！」

こうして、二人は二つ目の玉を手に入れました。

「アヤ、残すは黄色の玉よ。だけど、油断をしちゃダメよ」

「わかってるわ、ロン。でも、どうして、『王様気取りのこわいが犬』は私たちを助けてくれたのかなあ」

アヤが不思議そうに言うと、

「さあ、どうしてなのかしら。何かたくらんでいなければいいけど……」

二人は気になりながらも、二つ目の青い玉をのぞきこみました。

「次は、どうも森の方ね。しかもかなり奥まで入って行くみたいよ」

ロンが言うと、

「あと一つ見つけられれば全部そろわ。行くわよ、ロン」

「アヤと二人なら、三つ目も見つけられそうだわ」

「うん」

二人は、今までの疲れも忘れて、張り切って走り出しました。

しばらく進むと、突然追跡タイヤが何かの影をうつしました。

「これは、『かしこいがネズミ』だわ。このネズミは人なつっこくて、とても頭がいいの」

「へえ、じゃあ、私たちの仲間になってくれないかしら」

と、アヤが言うと、ロンも、

「それがいいわ」

と、賛成しました。

「タイヤによると、『かしこいがネズミ』は、自分のまねをされると、仲間と間違えて、近づいてくるらしいわ」

「じゃあ、『かしこいがネズミ』のまねすりゃあいいじゃん。簡単だね」

と、アヤが言うと、

「でも、ちょっとでも違ふと、怒り狂っておそってくるから気をつけて」

ロンにそう言われて、アヤは慎重に近づいていきました。途中で、『かしこいがネズミ』はアヤに気づいたのでときどきしましたが、アヤは、落ち着いてポーズをまねました。すると、『かしこいがネズミ』は一歩近づいてまた、違うポーズをとりました。アヤはすかさずまねをしました。今度も大成功。『かしこいがネズミ』は、アヤとロンを仲間だと思ったようで、にっこりわらいました。

「『かしこいがネズミ』さん、あなた、名前は？」

と聞くと、

「ぼくの名前はチューQ」

と答えました。こうして、仲間が一人増えました。

「さあ、急ぎましょ」

二人が走り出そうとすると、チューQが二人を呼び止めました。

「気をつけて、この森には、『しつこすぎるゆうれい』がいるっチュー」

「私、ゆうれいも苦手なんだけど……」

「だいじょうぶよ。これがあるでっチュー」

そう言って、チューQがポケットから水色の小びんを取り出しました。

「さっすが、チューQ。スゴイ。……っていうか、何それ？」

「これは、姿を消すことができる聖水だっチュー。ひと口飲めば、だんだん体が消えて

いくでっチュー」

アヤとロンはチューQがくれた聖水をごくりと飲みました。最後にチューQも飲むと、三人の姿は、どんどん消えていきました。

「これで、準備オッケーね」

三人は、薄暗い森の奥へ奥へと進みました。ずいぶん歩いたころ、優しそうな笑顔でこちらにおいておいでと手をふる人がいます。よく見ると、足がありません。

「あれが、『しつこすぎるゆうれい』ね。私たちをよんでいるわ」

アヤが言うと、

「そうよ。あれが『しつこすぎるゆうれい』よ。でも、わたしたちには、気づいてないようよ。あっちこっちに手をふっているわ」

とロンが答えました。

「今のうちにこの森を抜けるっチュー。聖水の効き目は5分間。一気に走るチュー」

三人は『しつこすぎるゆうれい』たちにぶつからないように、全速力で走り抜けました。

「これで『しつこすぎるゆうれい』は、最後だっチュー。これで、この薄気味悪い森をやっと抜けたっチュー」

その時です。

「あっ、黄色い玉だわ。アヤ、そっと近づいて」

ロンが叫ぶと、アヤは『しつこすぎるゆうれい』の後ろに転がっていた黄色い玉におそるおそる手を伸ばしました。

「やったあ。これで三つの玉をゲットしたわ。でも、これをどうするのかしら」

そう言いながら、黄色い玉をのぞきこむと、追跡ダイヤはこの辺りでちかちかしています。

「何もないみたいだけど……」

アヤががっかりして言うと、

「いや、これは、生き物が簡単によりつけない結界が張ってあるんだと思うわ」

とロンが言いました。すると、いきなり、チューQが叫びました。

「こっちに来てでっチュー。ここに、丸い光の壁があるでっチュー」

アヤが手を伸ばしてみると、手がすうっと入りました。それを見たロンが、入りましようというようにうなずきました。

三人が結界の中に入ると、金の宝箱が一つありました。そして、地面には何やら文字が書いてありました。

「これ、じゅ文で開くとか」

アヤがつぶやくと、チューQも、

「たぶん。だってこの宝箱、かぎ穴がないでっチュー」

と答えました。

「じゃあそのじゅ文って……」

ロンが言いかけると、三人は同時に地面の文字を指さして叫びました。

「それじゃあ、これが、宝箱を開けるじゅ文!？」

「『のたたもしれたばたらえ』んで、『たぬきの逆立ち』か。……意味わかんないなあ」

『たぬきの逆立ち』……たぬき、た、ぬ、き……。あっ」

『た』を抜くんだわ」

アヤとロンは同時に叫びました。

「ということは、『のもしればらえ』……。うん？ これでもまだ意味分かんないでっチュー」

三人はだまってしまいました。

『逆立ち』か……」

「あっ、逆さまだわ。そうよ。言葉を逆さまにして読めばいいのよ」

「さすが、アヤ。そうすると……」

「え・ら・ば・れ・し・も・の！」

三人がそう叫ぶと、宝箱のふたが開き、赤青黄の三色の光に包まれました。

中を見ると、三つのくぼみがありました。

「きっと、このくぼみに三つの玉をはめこむのね」

アヤがそう言うと、ロンが大きくなすきました。

三人は、一人ずつ玉を置いて行きました。最後の玉がはめ込まれた時、光は金色に変わり、その中から一人の青年が出てきました。

「ありがとう、選ばれしものたちよ」

「スゴイ。……ってというか、あんた誰？」

「わたしは、この国の王、プロテニだ。百年前、この国を襲ってきた妖怪たちに呪いをかけられ、犬にされていたのだ」

「あっ、もしかして、私たちを助けてくれたあの『王様気取りのこわいが犬』は、あなただったの？」

「そうだ」

「でも、どうして、私たちが選ばれし者なの？」

「それは、この国が妖怪たちに侵略された日に生まれた者にしか、この宝箱の玉をはめ込めないからだ」

「ってことは、ロンもチューQも六月二十三日生まれ？」

「そうよ、六月二十三日！」

「みんな同じ誕生日だったなんて、びっくりでチュー」

「私たち三人が、この百年の呪いを解いたのね。すごいわ」

アヤは興奮して何度もロンやチューQに抱きつきました。

「では、お礼に、友情のしるし『トリプルストーン』をプレゼントしよう」

「えっ、何、そのトリプルストーンって？」

「これは、三人が『会いたい』と願ってこのストーンを握ると、また、ここで会うことができるという友情のストーンだ」

「じゃあ、これがあれば、また、ロンやチューQに会えるのね」

アヤは嬉しくて、思わず飛び跳ねました。

「やったあ、また、会えるでっチュー」

「これからも、私たちはいつまでも友だちよ」

そう言って、ロンはウインクしました。

「さあ、これで今日の私たちの冒険はおしまいね。さあ、アヤ、『長短マーチ魔法』で一分後に戻してあげるからね」

「うん、ありがとう、ロン。また、遊びに来るから、その時はまた『長短マーチ魔法』でお願いします」

「それっ」

ロンが魔法をかけると、アヤは、いつもの登校中に戻りました。

「いたたたた……っていうか、なんでひざから血が出ているの。そういえば、あの不思議な世界に行く前にこけたんだっけ……」

そう思って、かばんの中を見てみると……。小さな紙が入っています。紙を広げると、

『いつまでも友だち……アヤの親友、ロンとチューQより』

アヤは、胸がキュンと熱くなりました。プロテニからもらったトリプルストーンも入っています。

「夢じゃなかったんだ。……っていうか、最高の誕生日だわ」

アヤは、そうつぶやくと、ひざの痛さも忘れて、学校まで思いっきり走って行きました。